

四四

(注一) 「シンポジウム」日本文学⑤『平家物語』第一章『平家物語』の生成 外部資料の意味 「兵範記紙背文書」の記事をめぐって
中の発言

(注二) 富倉徳次郎『平家物語全注釈』(昭和四二年十二月)下巻
(一) 内裡女房の**解説**など

(注三) 新潮日本古典集成『平家物語』下(昭和五六年十二月)一四六頁
の補説など

(注四) 『平家物語全注釈』下巻(一) 戒文の**解説**など

之者、爲敵被虜、強非恥辱、早可被處斬罪云々、無纖芥之憚奉問答、聞者莫不感、其後被召預狩野介云々（寿永三年三月二十八日）

とあり、延慶本などの記事と、内容に於て、殆んど変わらない。

ただ、「焼南都給事」を問い質しているところは『吾妻鏡』にない。

『吾妻鏡』と同様に「焼南都給事」に触れないのが源平盛衰記であり、問い質しが首尾整っているのが覚一本である。延慶本・長門本は、問い質しだけあつて返事がないという不完全な形になっている。

従つて、『平家物語』は、覚一本（語り本）をその最も整つたものとして、この場面にも「焼南都給事」の影を落とそうとする傾向があつたと考へ得るが、源平盛衰記をどう位置付けたら良いのかということについては詳にし得ない。

(ホ) ① 本三位中將ヲハ南都ノ大衆ノ中ニ出シテ頸ヲ切テ奈良坂ニ係ヘシトテ
② 源三位入道子息藏人大夫頼兼力奉ニテ具テ上ラル（第六本三十五 重
③ 衡卿日野北方ノ許ニ行事）

校異①「本三位中將重衡卿者狩野介宗茂にあづけられて去年より伊豆國におはしけるを南都大衆頼に申ければ」アリ（覚） ②重衡をハ

（盛）・ナシ（覚） ③南都の大衆へ出してかうへをはねなら坂にかくへし（盛）・さらばわたせ（覚） ④「故」アリ（覚） ⑤入道頼政か息（盛）・入道のしそく（長）・頼政の孫伊豆（覚） ⑥相具して（盛）・承てくそくしてのほる（長）・に仰て遂に奈良へ

ぞつかはしける（覚）

（注）四部合戦状本にはこの章段がない。

これは、重衡が「南都ノ大衆」へ引き渡されるべく、源頼兼に連れられて上洛することを記したところである。

『吾妻鏡』の文治元年六月九日の条に

又重衡卿、自去年在狩野介宗茂之許、今被源藏人大夫頼兼、同以進發、任衆徒申請、可被遣南都云々

とあるので、この部分が史実であることは認められる。『吾妻鏡』の表現に比較的近いのが覚一本であるが、これなどは、『吾妻鏡』を参照したと見なされよう。

猶お、「重衡卿日野北方ノ許ニ行事」については、『愚管抄』巻第五に重衡ヲバ頼政入道ガ子ニテ頼兼ト云者ヲソノ使ニサタシノボセテ東大寺ヘグシテユキテ切テケリ 大津ヨリ醍醐トヨリ、ヒツ川ヘイデ、宇治橋ワタリテ奈良ヘユキケルニ、重衡ハ、邦綱ガムスメニ大納言ノスケトテ、高倉院ニ候シガ安徳天皇ノ御メノトナリシニムコトリタルガ、アネノ大夫三位ガ日野ト醍醐トノアハイニ家ツクリテ有リシニアイグシテ居タリケル、コノモトノ妻ノモトニ便路ヲヨロコビテヨリテ、只今死ナンズル身ニテ、ナク／＼小袖キカヘナドシテスギケルヲバ、頼兼モユルシテキセサセケリ、大方積悪ノサカリハコレヲニクメドモ、又カ、ル時ニノゾミテハキク人カナシミノ涙ニヲボ（ホ）ユル事ナリという証言がある。

（未完）

ころである。この型は、どこか、建礼門院徳子が後白河法皇に、生きながら「六道ヲ御覽セラレケル」ことを語る場面に似ていないであろうか。或いは、この章段を中心として「重衡卿被切事」に至る一連の重衡説話は、もう一つの「灌頂卷」として語られたのかもしれないと思うのである。

重衡の語る「南都炎上」の「罪業」は複雑と言う外ない。それが、重衡にとって「不及力次第」であったというのも確かであろう。「責一人二婦ストカヤ申事ナレハ」というのは、この「罪業」を理解する唯一の道であったに違いない。

重衡の「罪業」は「随世道難遁シテ」「大將軍ヲ勤」めた者が、時として引き受けねばならぬ「罪業」である。これを身に染みて感じることできた人々は、源平の戦いに始まった武士の時代においても少なくなかったであろう。

しかし、これら一連の重衡説話が、最終的に建礼門院説話に及ばなかったのは、大將軍と女院の落差の違い、「治承物語」から『平家物語』への変貌に、主に、原因したのではなかったろうか。

①抑焼南都給事ハ ②太政入道殿ノ仰ニテ候シカ ③期ニ臨タル御計ニテ候ケルカ ④以外ノ罪業ニコソ ⑤ト被申ケレハ ⑥(中略) ⑦此人ハ名ヲ流シタル大將軍也 ⑧無左右下可奉切 ⑨南都大衆申旨有 ⑩ト兵衛佐宣テ(第五) ⑪八 重衡卿關東へ下給事) 校異①ナシ(盛)・抑南都を焼給し事は(長)・抑南都をほろぼさせ給

ひける事は(覚) ②「故」アリ(覚) ③ナシ(盛) ④「又」アリ(長・覚) ⑤ナシ(盛)・時にのそめる御はからいにて候けるか(長)・時にととの御ばかりにて候けるか(覚) ⑥ナシ

(盛)・以外のさいこうにてこそ(長・覚) ⑦「候へ」アリ(長)・「候なれ」アリ(覚) ⑧ナシ(盛)・とのたまひければ(長)

⑨「三位中將の給ひけるは、まづ南都炎上の事、故入道の成敗にもあらず重衡が愚意の發起にもあらず、衆徒の悪行をしづめんが爲にまかりむかて候し程に不慮に伽藍滅亡に及候し事力及ばぬ次第也」

アリ(覚) ⑩ナシ(盛・長・覚) ⑪ナシ(盛・長)・南都をほ

ろぼしたる伽藍のかたきなれば(覚) ⑫ナシ(盛・長・覚) ⑬

南都の衆徒も申旨あり(盛)・ナシ(長)・大衆さだめて申旨あらんずらん(覚) ⑭とて(盛・覚)・ナシ(長)

(注) 四部合戦状本にはこの部分がない。

これは、頼朝が重衡に「焼南都給事」を問い質しているところと、その処置について、注意を与えているところとである。

この面謁の様は、『吾妻鏡』に

被請本三位中將藍指直垂引於廊令謁給、仰云、且爲奉慰君御憤、且爲雪父尸骸之恥、試企石橋合戦以降、令對治平氏之逆乱如指掌、仍及面拜不屑眉目也、此上者謁槐門之事、亦無所疑歟者、羽林答申曰、源平爲天下警衛之處、頃年之間當家獨守朝廷之、許昇進者八十餘輩、思其繁榮者二十餘年也、而今運命之依縮、爲因人參入上者、不能左右、携弓馬

猶お、諸本の関係について気付いたことを記すと、このところでは、源平盛衰記と四郎合戦状本に共通する表現があることに興味が持たれる。

①就中 ②南都炎上ノ事 ③云王宣父 ④命ト申 ⑤随世道難遁シテ為ニ鎮シガ

衆徒ノ悪行ヲ罷向テ候シ程ニ不慮ニ伽藍滅亡ニ及シ事不及力次第ニ候

ヘトモ ⑥大將軍ヲ勤候シ上ハ責一人ニ歸ストカヤ申事ナレハ重衡力罪業

ニ成候ヌト覚候 ⑦且ハ加様二人シレス比コ彼コニ恥ヲ曝シ候モ併ラ其報

トノミコソ思知ラレ候ヘハ(第五 末 五 重衡卿法然上人ニ相奉事)

校異①「なんとをほろほし候し事しけひらかしうきやうと人も申候 上

人もさこそおほしめされ候らめ その事努くしけひらか心をおこ

してやきたる事候ハす 大せいにて候へハいかにとして候けん火い

てき候しかハおりふし風はけしくて心ならずおほくのからんふつそ

うきやうてんやけほろひ候ぬ せめ一人にきすと申候へハしけひら

かけちにハあらねともさなから我つみにこそなり候らめ されハむ

けん大しやうのそこにおちてなかくしゆつりの期あらしとこそ存候

つるに今日いきながらとられておほちをわたされ候ぬれはむけんの

こういきなからむくひ候ぬとこそ存候へ(以下略) 「アリ(長)

②「に」アリ(覚) ③「君につかへ世にしたかふならひにて」ア

リ(盛) ④申(盛) ⑤命と(盛・長・覚) ⑥「の」アリ(長)

⑦いひ(長・覚) ⑧「君につかへ」アリ(長・覚) ⑨ナシ(盛)

・代にしたかうはうのかれかたくして(長・覚) ⑩ナシ(盛)

⑪むかふ所に(盛)・むかひて候き(長) ⑫はからざるに(盛)

・ナシ(長) ⑬からんのめつはうに(盛・覚)・ナシ(長) ⑭

ナシ(長)・及候し事(覚) ⑮力及はさるしたひ也といへとも

(盛)・ナシ(長) ⑯「時の」アリ(覚) ⑰大將くんにつとめ

しうへは(盛)・ナシ(長)・大將軍にて候し上は(覚) ⑱ナシ

(盛・長)・せめ一人に歸すとかや申候なれば(覚) ⑲ナシ(長)

・重衡一人が罪業(覚) ⑳とまかりなる(盛)・ナシ(長)・に

こそなり候ぬらめと覚え候(覚) ㉑其むくひにやおほき一もんの

中に我身一人生とられて京る中はちをさらすにつても一生の所行

はかなくつたなき事とおもひあはせるに(盛)・ナシ(長)・かつ

うはか様に人しれずかれこれ恥をさらし候もしかしながらそのむく

ひとのみこそおもひしられて候へ(覚)

(注) 四部合戦状本にはこの章段がない。

これは、重衡が法然上人に「後世可助方法」を聞くべく、我が身の「罪

業」を語っているところの一部である。

重衡が事実、『平家物語』の描くように、法然に会ったかどうかは確か

でない。^(注三)又、この章段の成立については、「黒谷ノ法然上人」という呼び

方や『般舟讃』の引用などがあることから、上限を一二六〇年頃とする考

え方などが提示されている。^(注四)

この掲出部で注目されることは、重衡が自ら「人シレス此コ彼コニ恥ヲ

曝シ候」事を南都を焼いたことの報いと受け取っていることを告白すると

是ッ成(四)・罪のむくひぞや　いくらもまします君達のなかにか
くなり給ふ事よ　入道殿にも二位殿にもおぼえの御子にてましまひ
しかば御一家の人々もおもき事におもひたてまつり給ひしぞかし
院へも内へもまひり給ひし時は老たるも若もところををきもてなし
たでまつり給ひし物を(覚)　⑧南都東大寺よりはしめて仏さう經
くわんやきほろほしむくひなれはかゝるうきめをミ給にや　され
ともあはれ事にふれて人になさけをかけよろつにかひくしくはな
やかなりし人そかし　おやのいとおしみもさる事にてよその人まで
もたのもしき事に思ひ申し、そかし(盛)・これは南都をほろぼし
給へる伽藍の罰にこそ(覚)　⑨なんと上下口々にあはれひけり
(盛)・とぞ申あひける(長)・ト人申合(四)・と申あへり(覚)

⑩「院宮の女はうたちの中にもなれちかつき給ひたる人々もおほく
おはしければこれをき、見てもた、夢の心ちしてそおほしあはれけ
る」アリ(盛)

これは、重衡が六条通りを渡されるのを都人が見て、「南都ヲ滅シ給ヌ
ル罪ノ報ニヤ」と、噂し合っているところである。

「重衡卿大路ヲ被渡^サ事」は『吾妻鏡』に見える

右衛門權佐定長奉勅定、爲推問本三位中將重衡卿、向故中御門中納言
^{家成}八條堀川堂、土肥次郎實平同車彼卿來會件堂、於弘庇問之、口狀條

々注進之^ニ々(寿永三年二月十四日)

を拡大して名付けたものである。

源平盛衰記、長門本がこの『吾妻鏡』の表現に最も近い。この場合を含
めて、筆者は、源平盛衰記、長門本の共通祖本を考えてみる時、延慶本に
近い本が窺われることに興味を持っている。

「上下万人」の噂は確かめようもないが、『建禮門院右京大夫集』の
しけひらの三位中將のうき身になりてみやこにしはしときこえしころ、
ことにくむかしちかゝりし人くの中にもあさゆふなれておかしき
ことをいひ、又、はかなきことにも人のためはひんきに心しらひあり
なとしてありかたかりしを、いかなりけるむくひそと心うし　みたる
人の御かほはかはらてめもあてられぬなといふか心うかなしさいふ
かたなし

という詞書きなどは、その一つの参考資料であろう。

ここで右京大夫は「いかなりけるむくひそと心うし」としか述べていな
いが、『平家物語』は「南都ヲ滅シ給ヌル罪ノ報ニヤ」という言葉で言い
納めさせている。

「南都ヲ滅シ給ヌル罪」というのは、一節で取り上げた、重衡の父、清
盛の死の場合と同じである。猶お、清盛の死の延長ということで一言する
と、延慶本よりも、源平盛衰記、長門本、覚一本の方が、「日本第一の大
からんをほろほしたりしかあひのほのかねて思ひやるこそくるしけ
れ」(源平盛衰記)などの表現を持っていて、一層鮮明である。

筆者は、重衡の死を、このように清盛の死の延長と捉えていくところに、
「治承物語」を「平家」にして行った流れを考えてみるのである。

○去十五日、本三位中将〔遣〕前左衛門尉重國於四國、告勅定旨於前内府、是舊主并三種寶物可奉歸洛之趣也、件返狀〔今日到來于京都、備

叡覽^{云々}（『吾妻鏡』二月二十日）

とあるので、史実と考えられている。^{（注二）}

ただし、『平家物語』が描いているように、重衡が「院宣ノ趣条々仰含」（延慶本）められて、しかも、その院宣に露骨に交換を謳ってなされたものであったかどうかは、『玉葉』の

定長又語云、重衡申云、書札副使者^{重衡郎、從云々}、遣前内府之許、乞取劔璽可進上云々、此事雖不可叶、試任申請可御覽云々（二月十日）

といった記事から、疑問が残るところである。

①②（ロ）二月十四日本三位中将重衡ヲハ六条ヲ東へ被渡^{サケリ}上下万人是ヲ

見テ^⑥何ナル罪ノ報ソヤ^⑦哀レ此人ハ入道殿ニモ二位殿ニモオホエノ子

ニテオワセシカハ一家ノ君達モ重キ人ニ思奉リシ物ヲ^⑧院ヘモ内ヘモ參

リ給ヌレハ老タルモ若キモトコロヲオキ詞ヲ係奉リキ^⑨口ヲカシキ事ナ

ト云置キ給テ人ニモ忍ハレ給シ物ヲ^⑩南都ヲ滅シ給ヌル罪ノ報ニヤト

ソ申シアヘリケル^⑪（第五^末一重衡卿大路ヲ被渡^サ事）

校異①「本三位中将重衡卿は庄三郎家長に生とられて再都へ歸りのほり

給 かけらるゝくひとゝさる事なれともいきながら故郷にはちを

さらし給こそむさんなれ」アリ（盛）・「本三位中将乍生被取上^{玉ッ}

無慙 觸事人懸^ツ、情花弥^カ 玠甲斐々々^{シキ} 人御哀無不思人^ヌ 院宮女

房達有昔馴近付^シ人^モ多ク 夢心地^シ實不思^玉」アリ（四）②ナシ

（盛）・二月十四日本三位中将しけひら卿を（長）・十四日重衡卿

（四）・同十四日いけどり本三位中将重衡卿（覚）③わたす（長）

④「小八葉の車に先後の簾をあげ左右の物見をひらく 土肥次郎實

平木蘭地の直垂に小具足ばかりして随兵三十餘騎車の先後にうちか

こで守護したてまつる」アリ（覚）⑤きせん男女市のことくにあ

つまりこれをミる くちく申けるハ（盛）・上下万人をみる

（長）・高^モ下^{シキモ}見之（四）・京中の貴賤これをみて（覚）⑥

「あまたの殿原の中に入道殿にも二位殿にもおほえの御子にておは

せしかハ一家人々覚おもき事にし給ひたりき 院内へまいり給しか

ハ老たるもわかきも所を置かしつき奉らせ給き 時々ハくちおかし

き事なんともいひをきて人に忍はれ給しものを」アリ（盛）・

「哀^レ入道殿^モ二位殿^モ覚^ヘ子御^{セシ}一門人々^モ奉^{玉シ}思重^キ人

呼何事^ッ 參^{ラセ玉ヘ}院内^ヘ老^モ若^モ被^レ奉優^ケ物^{シク}有^ル所^{テハ}口

鳴借^ヲ事共云置^{キ玉}人被^{玉シ}忍物」アリ（四）・「あないとをし」

アリ（覚）⑦むくひにてかくハ成給ぬるやらん といへはある人

の申けるは いかてかむくハさるへき（盛）・むくひにや あはれ

此人は入道殿にも二位殿にもおほへの子にておはせしかハ一家のき

んたちをももき人におもはれ給ひしものを 院へも内へも參り給ひ

ぬれハ老たるも若きもところををきこと葉をかけ奉りき くちおか

しき事なといひをき給ひて人にしのはれ給ひしものを」（長）・報^ヒ

月)で取り上げた、忠盛が「勸賞」として賜った国の「前後矛盾」に、よく似ている。

二

前節において、筆者は、延慶本以前から、清盛の死が「金銅十六丈ノ盧舍那仏焼奉タル伽藍冥罰」に帰して捉えられてい、従って、延慶本の本来の描写(意図)も、また、それに沿っていたとする私見を述べた。

「治承物語六局^{号平家}」については、「治承物語」と「平家」との関係如何という難しい問題がある。

「治承物語」については、

この「治承の物語」という書きかたで心がひかれるのは、『保元物語』『平治物語』、それに『承久物語』とともに『平家物語』が「四部合戦状」とよばれていたということ、この「治承の物語」という言い方は、年号を頭に冠しているということで共通するところがあるという点です。そうするとこのところは、私はやはり固有名詞としての『治承物語』ではないかと思われる。それから、その内容も治承年間のたんなる歴史的な物語であるというより、保元の乱、平治の乱あるいは承久の変などとおなじように治承の世における何らかの大きな事件を核心にした、いくさ物語的な色合いをもったものであったのではないか。

という梶原氏の御「想像^(注二)」に魅力を感じる。

これと「平家」との関係であるが、筆者はそうした「治承物語」が、次第に、世間では、「平家」と呼ばれるようになって行った(内容も、治承から後に広がって行ってしまった)、その初期の段階を示すものではないかと考えている。

「治承物語」がどうして治承年間に止まらなかったかということを考える一つの手懸かりは、やはり、「金銅十六丈ノ盧舍那仏焼奉タル伽藍冥罰」にある。「伽藍冥罰」は清盛の死で終わらなかったのである。

そこで、筆者は、次に、平重衡に関するところから、右の問題に関する部分を抜き出し、それぞれについて、検討、考察を加えていくことにする。

①<彼ノ重衡卿者<焼失^{セシ}東大寺^ヲ之逆臣也<任^テ頼朝<申請^ル之旨^⑦

雖須^⑧被行ハ死罪ニ(第五^末二 重衡卿賜院宣西國へ使ヲ被下事)

校異①「抑」アリ(覚) ②「依」あり(四) ③南都(四) ④「す

べからく」ガココニアル(覚) ⑤随(四) ⑥「朝臣」アリ(覚)

⑦なし(四) ⑧可(四)

これは、重衡の使い、重国が携えて行つたとされる院宣の一部である。

重衡が宗盛の下に、重国を遣したことは、『玉葉』や『吾妻鏡』に

○此次、定長語云、重衡所遣之使者^{左重衡門}歸參、又有消息之返事、申狀

大略庶機和親之趣也、所詮源平相並可被召仕之由歟、此條頼朝不可承

諾、然者難治事也(『玉葉』壽永三年三月一日)

國歸往之計者（『吾妻鏡』養和元年閏二月四日）

のように、歴史資料に見える。

「於京都不可成追善」とは言うものの、「於遺骨者納幡磨國山田法花堂、毎七日可修如形佛事」と言うのだから、延慶本を始めとする平家物語の、清盛の遺言は『吾妻鏡』から遠い。『玉葉』の悲壮な響きこそ、平家物語の遺言を生んだものではなかったろうか。

ところで、この(ホ)・(ロ)は、四部合戦状本を除いて、「永ク無間大城ノ底ニ入ラレムスル」理由を、「日本第一ノ伽藍聖武天皇ノ御願金銅十六丈ノ盧舎那仏焼奉タル伽藍冥罰」に帰せさせているのが、現に見る内容である。筆者は、その訳を、清盛の死を「伽藍冥罰」と受け取らねば済まない、延慶本以前の平家物語の影響に求めたい。

(二)・(イ)・(ハ)と(ホ)・(ロ)とは、或いは、清盛死去について併存していた描写だったのではあるまいか。その際、おそらく、(二)・(イ)・(ハ)が古く、(ホ)・(ロ)は、それに対峙すべく「伽藍冥罰」を取り込んだものであったろう。

延慶本（源平盛衰記も）は、この二種の描写（或いは、平家物語かもしれない）を、余り整理しないで収録したのである。(二)を欠く長門本・覚一本は、その整理の方向を反映したものに違いない。^(注四)

延慶本以前において、清盛の死が「金銅十六丈ノ盧舎那仏焼奉タル伽藍冥罰」に帰せられていたとする私見の由来は、まずは、右の通りであるが、その延慶本以前の本の一性格について、蛇足を加えて置きたい。

『玉葉』の治承五年閏二月五日の条には、

何況、魔滅天台法相之佛哉、只非堙滅佛像堂舎、顯密正教、悉成灰燼、師跡相承之口決抄出、諸宗之深義、秘密之奧旨、併遭回祿、如此之逆罪、無非彼之（臂吻）（中略）但神罰冥罰之條、新以可知、日月不墮地、爰而有憑者歟

とあって、全く、「金銅十六丈ノ盧舎那仏焼奉タル伽藍冥罰」は出てこない。先に問題にした『百鍊抄』の記事との関係からも、延慶本以前の平家物語に、東大寺との関りを考えて置くべきだと思うのである。

猶お、四部合戦状本には、全然、この「金銅十六丈ノ盧舎那仏焼奉タル伽藍冥罰」が出てこない。これをどのように位置付けるかはむずかしい問題だが、今のところ、筆者は、長門本・覚一本に通じる整理の一過程で生じた内容ではないかと見ている。

(注一) 拙稿「延慶本『平家物語』と『源平盛衰記』——住吉明神関係記事から——」（『人文』第五号 昭和五六年八月）などにおいて

延慶本に山王神道（特に、大宮や二宮に結び付いた）に関する傾向があることを指摘した。

(注二) ほぼ同じ内容のものが、『発心集』卷三にも見られる。

(注三) 新潮日本古典集成『平家物語』中（昭和五五年四月）一三五頁の頭注から

(注四) 延慶本、源平盛衰記が未整理の姿を止め、長門本、覚一本でそれぞれに整理されるというのは、拙稿「得長寿院の靈驗譚について」（『鹿児島県立短期大学紀要』第二八号 昭和五三年二

のように、歴史資料にも見える。

延慶本の(二)・(イ)・(ハ)は、右の『百鍊抄』の「身熱如火、世以爲燒東大興福之現報」に近いと言えよう。ただし、『百鍊抄』の伝えるものは興福寺を加えているが(源平盛衰記が(二)で、「南北二京の大伽藍」としているのが、相似た傾向と見なせよう)、延慶本は「金銅十六丈ノ盧舎那仏」だけとなっていて、東大寺に絞られている。

又、『養和元年記』の「盛雪於器令置頭上」・「洪水於船雖寒身体」は延慶本の(イ)の「提ニ水ヲ入テ胸ノ上ニヲキケレハ」・「比叡山千手院ト云所ノ水ヲ取下テ石ノ船ニ入テ入道其ニ入テ冷給ヘトモ」に近いと言えよう。ただし、延慶本(源平盛衰記・長門本も)には、「比叡山千手院ト云所ノ水」とあり、比叡山との関りに興味が持たれるのであるが、詳らかにし得ない。^(注二) 猶お、延慶本の(イ)には、熱を下げる為の処置が四つもあげてあり、そこでは、「後ハ」・「後ニハ」という重複する表現が使われているなど、杜撰さが目立つが、しかし、これは、逸話を蒐集した草稿段階の姿を示しているのではないかと考えられる。

二箇所のうち(ホ)は、『古事談』巻四ノ二一「義家人ノ夢ニ地獄ニ墮ツルト見エケル事」の

義家朝臣依無懺悔之心遂墮惡趣畢 病惱之時家之向ナリケル女房之夢
ニ地獄繪ニカキタルヤウナル鬼形之輩ソノ數亂入彼家捕家主大札ヲサ
キニ持之將出ケリ 札銘ニハ無間地獄之罪人源義家トカキタリ 後朝
ニカ、ル夢ミツルトテ令案内之處守殿比曉逝去^云

(注) 『古事談』は、現代思潮社、古典文庫本に依った。
との類似が注目されている。^(注三)

覚一本では二位殿の夢となっているが、類話との関係から、「広本等の女房の夢に古形を認め、二位殿の夢となるとところに文芸の展開を考えたい」とされる、水原一氏の見解に同じたい。^(注四)

更に、同様に、類話との関係からだが、筆者は「依無懺悔之心遂墮惡趣」という把握に注目して、(ホ)と(ロ)との繋がりを考えている。

本来、清盛が「永ク無間大城ノ底ニ入ラレムスル」次第となったのは、(ロ)に続く部分の

但最後ニ安カラス思置事アリ 流人頼朝カ首ヲミサリツル事コソ口惜
ケレ 死出山ヲ安ク越ヘシトモ不覚 入道死テ後報恩追善ノ營努々々
不可有 相構テ頼朝カ首ヲ切テ我墓ノ上ニ懸ヨ 其ヲ草ノ影ニテモ
悦クハ思ワムスル 子息侍ハ深ク此ノ旨ヲ存テ頼朝追討ノ志ヲ先トス
ヘシ 仏經供養之沙汰ニ不可及 トソ遺言シ給ケル (中略) イト
、罪深ク怖クソ覚ル

ということからではなかったかというのが私見である。

清盛の遺言については、

但故禪門閉眼之刻、遺言云、我子孫、雖一人生殘者、可曝骸於頼朝之前云々(『玉葉』治承六年八月一日)

遺言云、三ケ日以後可有葬之儀、於遺骨者納幡磨國山田法花堂、每七日可修如形佛事、毎日不可修之、亦於京都不可成追善、子孫偏可營東

火車也(盛)・からんの冥罰のかれかたきによって大政入たうとりいれんとてゑんまわうの火のくるまを将来なり(長)・なし(四)・罪によて(覚) ②③と申す(盛)・と申けれハ(長)・なし(四・覚) ②④なし(四・覚) ②⑤おそろし(盛)・みるも身の毛たちておそろしなといふハかりなし(長)・なし(四・覚) ②⑥なし(四・覚) ②⑦なから(盛)・なし(四・覚) ②⑧さてあの鐵の札に無といふもしかきたるハ何事ぞ(盛)・何事(四)・なし(覚) ②⑨と、へは(盛・長)・なし(四・覚) ③⑩「鬼答て云」アリ(盛) ③⑪入道仏像經卷を焼失て既に五逆を犯せり なかく阿鼻大地獄に落て無間の重苦をうくへき無間の無しるしの札なり(盛)・なかく無間大城のそこにいれんする召人なるかゆへに無といふもんしをかきたるなり 無間ちこくのふた也(長)・なし(四)・無間の底に墮給ふべきよし閻魔の廳に御さだめ候が無間の無をかゝれて間の字をばいまだかゝれぬなり(覚) ③⑫と申とミて(盛)・思ッ(中略)之程(四)・とぞ申ける(覚) ③⑬「二位殿」アリ(覚) ③⑭覺にけり(盛)・夢さめけり(長・四)・うちおどろき(覚) ③⑮さめて後も猶夢の心ちせり 偏身にあつき汗なかれてうつゝ心なし おそろしなとハ疎かなり(盛)・むなさハきしてひやあせたりておそろしなとおろかなり(長)・なし(四)・あせ水になり(覚) ③⑯「かたへの女房一兩人にそかたりける」アリ(盛)・「後語^{ケレ}人立^チ車前後之者云牛頭馬頭之鬼 車火車 無文字書札墮無間阿鼻大

城人不顯間字不^{ストツ}見へ申」あり(四)・「是を人々にかたり給へばきく人みな身の毛よだちけり」アリ(覚) ③⑰其後かの女房心ちれいならずとて日比なやミて二七日といふに死にけり(盛)・かの女房この夢みたりけるより病つきて二七日といふに死にけり(長)・なし(四・覚)

(注) 延慶本・源平盛衰記は古典研究会叢書影印本に、長門本は伊藤家藏本の影印本に、四部合戦状本は斯道文庫編校影印本に、覚一本は日本古典文学大系本に、それぞれ依つた。猶お、校異欄では、(盛)などの略号を使った。

(イ) (ホ)の五箇所にわたつて引用し、校異を付けたが、延慶本では、このうちの二箇所、(ニ) (ホ)に「金銅十六丈ノ盧舎那仏ヲ奉リ焼給タル伽藍ノ罰ヲ立所ニカフリ給ヘルニコソ」という言葉が出てくる。

二箇所のうち、(ニ)は、「是ハ只事ニアラス」という表現が、(イ)の「少モ直事トオホヘス」という表現に対応しているので、清盛の「身中熱スル事」を描いている(イ)・(ハ)に結び付いたものと考えられる。

清盛の病が非常な高熱を伴つたらしいことは、

○或云、臨終動熱悶絶之由巷説云々(『明日記』閏二月五日)

○身熱如火、世以爲燒東大興福之現報(『百鍊抄』閏二月四日)

○五内如焦、盛雪於器令置頭上、洪水於船雖寒身体、煙騰毛穴雪水如湯

(『養和元年記』)

②③「ぞ」アリ(覚) ②④失(盛)・し、(長)・し(覚) ②⑤「給」

アリ(盛・長・四・覚) ②⑥ける(覚)

(二)是ハ只事ニアラス 金銅十六丈ノ盧舎那仏ヲ奉リ燒給タル伽藍ノ

聖教燒き失ふ 其の故にかくじ給ひけり 後の世のくけんも思やられてむさん也

罰ヲ立所ニカフリ給ヘルニコソト時人申ケリ

(注) 源平盛衰記の校異を本文の左に細字で記した。長門本・四部合戦

状本・覚一本には、この箇所はない。

(ホ)入道失給ハムトテ先七日ニ當リケル夜半計ニ入道ノ仕給ケル女房不思議ノ夢ヲソ見タリケル 立フチ打タル八葉ノ車ノ内ニ炎ヲヒタ、シクモ

ト二人福原ノ御所東ノ四足ノ門ヘ引入ケレハ女房夢心地ニアレハ何ク

ヨリソ ト云 鬼神答云ク 日本第一ノ伽藍聖武天皇ノ御願金銅

十六丈ノ盧舎那仏燒奉タル伽藍冥罰難遁ヨテ大政入道取入スル焰

大王ノ御使火車ヲ將來ルナリ ト云ケレハ女房ミルモ身ノ毛豎テ怖ナム

トハナノメナラス アサマシト思テ女房 サテアノ札ハナニソ トイヘ

ハ 永ク無間大城ノ底ニ入ラレムスル召人ナルカ故ニ無ト云字ヲハ書

タル也 是無間地獄ノ札也 ト申ト思ケレハ 夢サメテケリ 心騒キ冷

汗タリテヲソロシナムトハ愚也 彼女房此夢ミタリケルニヨテ病付

テ二七日ト云ニ死ニケリ

校異①入道明日病付給ハんとての夜(盛)・大政入たうし、給ハんとて

②そのうちの女房の夢に見けるハ(盛)・西八条女房夢(四)・入

道相國の北の方二位殿の夢に見給ける事こそおそろしけれ(覚)

③立ふち打たる八葉の車に(盛)・大政入道門前新キ車勇氣ニ躰ハ

人為シ牛馬面之者七八人立門前 参リ入道殿御迎候 差シ寄ル車

見レ車内(四)・ナシ(覚) ④火(四)・猛火(覚) ⑤「の」

アリ(長・覚) ⑥なし(四) ⑦なし(四・覚) ⑧ける(盛)

・たる(長・覚) ⑨「車を門の内へやり入たり 前後に立たるも

のは或は馬の面のやうなるものもあり或は牛の面のやうなるもあり」

アリ(覚) ⑩中に(盛・四)・車のまへには(覚) ⑪た、一つ書た

る鉄の札あり(盛)・一ッ、書キ札立呼(四)・ばかり見えたる鐵

の札をぞ立たりける(覚) ⑫青鬼と赤鬼と先に立てかの車を福原

の入道の宿所の東の門へ引入たり(盛)・なし(四・覚) ⑬女房

夢の心ちに(盛・長)・なし(四)・二位殿夢の心に(覚) ⑭あ

れハとこより何事に来れる者ぞ(盛)・なし(四) ⑮とへハ(盛)

・いへハ(長)・なし(四)・御たづねあれば(覚) ⑯鬼答て云

(盛)・鬼神こたへていハク(長)・なし(四・覚) ⑰「われら

ハ焰魔大王の御使に獄卒といふ者也」アリ(盛)・「閻魔の廳より

平家大政入道殿の御迎にまいて候と申きて其札は何といふ札ぞと

とはせ給へば」アリ(覚) ⑱聖武皇帝の御願日本第一の大伽藍

(盛)・日本第一の大からん聖武天皇の御くわん(長)・なし(四)

・南閻浮提(覚) ⑲なし(四) ⑳「ほろほし」アリ(盛・覚)

㉑給へる(盛・覚)・なし(四) ㉒咎に太政入道の迎へとるへき

④ナシ(盛) ⑤あつく(盛)・あつう(覚) ⑥「ハ」アリ(長)

⑦たへかたく覚しけれ(盛) ⑧「二位殿」アリ(盛) ⑨ナシ

(盛・四・覚) ⑩「て」アリ(長) ⑪もとに(盛)・の上に

(覚) ⑫ナシ(覚) ⑬「給」アリ(盛)

①余リノ難堪ニ^③比叡山千手院ト云所ノ水ヲ取下テ石ノ船ニ^⑤入テ入道

其ニ入テ冷給ヘトモ下ノ水ハ上ニ涌キ上ノ水ハ下ヘ涌コホレケレトモス

コシモ助リ給心地モシ給ハサリケレハ^⑭セメテノ事ニヤ板ニ水ヲ汲流テ

其上ニ臥マロヒテ冷給ヘトモ猶モ助ル心地モシ給ワス^⑮後ハ帷ヲ水ニヒ

ヤシテ二間ヲヘタテ、投懸々々シケレトモ無程ハシ／＼トナリニケリ

カ、ヘヲサフル人一人モナシ ヨソニテハトカク云匍リケレトモ叶ワス

後ニハ提ニ水ヲ入テ胸ノ上ニヲキケレハ無程湯ニソ涌ニケル^⑯問絶躰

地シテ七日ト申シニ終ニアツチ死ニ^⑰死ニ^⑱ケリ

校異①「四日 入道病に責ふせられ給へり」アリ(盛)・「その日のく

れほとに入道病にせめふせられて」アリ(長) 「同四日入道被逼伏」

あり(四) ②もえこかれてたへかたしと宣ければ(盛)・たへか

たさに(長・四)・ナシ(覚) ③「百人の夫をたて、をひつきを

ひつきに」アリ(盛) ④比叡山の千手院より水をむすひ下して

(盛)・ひえいさんの千手院の水をとりくたして(長)・なし(四)

・比叡山より千手井の水をくみくだし(覚) ⑤「水」あり(四)

⑥た、へ(盛・覚) ⑦なし(四・覚) ⑧その中(盛)・かの水

(長)・彼レ(四) ⑨下ル(四)・おり(覚) ⑩なし(四)

⑪給けるに(盛)・給へば(覚) ⑫水ハわきかへりて湯になれと

も(盛)・したの水うへにわきあかり上の水ハしもにわきこほれけ

れとも(長)・なし(四)・水おびた、しくわきあがて程なく湯に

ぞなりにける(覚) ⑬さらに苦痛ハまさりけり(盛)・不助ラ

(四)・ナシ(覚) ⑭「もしやたすかり給ふと笕の水をまかせた

れば石やくろがねなどのやけたるやうに水ほどばしてよりつかず

をのづからあたる水はほむらとなてもえければくろけふり殿中にみ

ちみちて炎うづまひてあがりけり 是や昔法藏僧都といし人(中略)

けんも今こそおもひしられけれ (ホ・口)を含む部分が、この順で

ここにある) 同四日 やまひにせめられ」アリ(覚) ⑮なし

(盛・四)・せめての事に(覚) ⑯後にハ板に水をまかせて臥ま

ろひて冷し給へともなをたすかる心ちし給はす(盛)・いたしきに

水をくみなかしてそのうゑにふしまろひてひえ給へともなをもたす

かる心地もし給ハす(長)・なし(四)・板に水をゐてそれにふし

まろび給へ共たすかる心ちもし給はず(覚) ⑰ナシ(盛・四・覚)

・のちにハかたひらを水にひたして二間をへたて、なけかけ／＼

しけれども程なくはし／＼となりにつり か、へおさふる人一人も

なし くちにてハとかくい、の、しりけれどもかなハす(長) ⑱

ナシ(盛・長・四・覚) ⑲「療治も術道も験を失ひ仏神の祈誓も

むなしきかことし 終に七ケ日と申すに」アリ(盛) ⑳ナシ(盛

・四・覚)・七日と申に(長) ㉑ナシ(盛・四) ㉒周章(盛)

の記事をめぐって 中の発言。

一

冒頭部に掲げた拙稿の、三島明神関係詞章についての結論を繰り返せば、それは、頼朝の敵討ち譚に結び付いた三島明神（「千夜通夜」の）の靈力譚という性格を持つもので、「有様傳承コソ心モ詞モ及ハレ」ぬ人としての清盛像と殆んど関りを持たない、未消化の説話という感じが強いということであつた。

延慶本における清盛の死に様が殆んど三島明神との関りを持っていないとすれば、三島明神関係詞章が採り入れられる以前の清盛の死に様に関する事柄の存否が興味をひくことになる。「金銅十六丈ノ盧舎那仏ヲ奉リ焼給タル伽藍ノ罽ヲ立所ニカフリ給ヘルニコソ」といったとらえ方がそこで、浮かび上がってくる訳なのであるが、これこそ、延慶本の清盛の死の本来の文脈ではないか、というのが私見である。

そこで、次に、延慶本の第三 十三「大政入道他界事付様々ノ旅 異共有事」から関係のある箇所を抜き出して示して置こう（前記の理由から、源平盛衰記・長門本・四部合戦状本・覚一本の表現の異同を校異として示した）。

(イ) 病付給ケル日ヨリ① 水ヲタニモ喉へく入給ハス 身② 中③ 熱スル事④
 火燃如シ 臥給ヘル 二三間力中へ入者アツサ難堪ケレハ近ク有者希也
 宣フ事トテハアタ／＼ト計也 少モ直事トオホヘス

校異①「入道相國」アリ（覚） ②る（長）・シ（四・覚） ③「し

て白き」アリ（盛・長・四） ④ナシ（長・覚） ⑤「も」アリ（盛・覚） ⑥「の」アリ（盛・長・覚） ⑦「の」アリ（盛・覚） ⑧もえこかれける事（盛）・あつきこと（長・覚）・熱サ（四） ⑨「ハ」アリ（盛） ⑩に入れるか（盛）・のゆるるか（長）・焼以（四）・をたくか（覚） ⑪「所」アリ（覚） ⑫四五（覚） ⑬へは人近付よる事なし あまりにあつたへかたかりけれハ也（盛）・か内へ入ものハあつたへかたけれハちかくよるものまれなり（長）・所へ入ル者熱サ難シ堪へ而シ近寄ル人希ナリ（四）・が内へ入ものはあつたへがたし（覚） ⑭「たゞ」アリ（覚） ⑮さけひ給ける（盛）・言玉（四） ⑯「た、」アリ（盛） ⑰「此こ系門外までひ、きておひた、し」アリ（盛） ⑱ナシ（盛） ⑲なをる（長） ⑳ハ（長） ㉑「も」アリ（盛）・「は」アリ（覚） ㉒みえず（長・四）・みえざりけり（覚）

(ロ) 入道ハ音イカメシキ人ニテオワシケルカ音モワナ、氣息モヨワク事ノ外ニヨハリテ身ノ膚へ赤キ事ハ朱ヲ指タル者ニコトナラス 吹出ス息ノ末ニ當ル者ハ炎ニ當ニ似リ 潤二月二日二位殿アツサ 難堪ケレトモ 屏風ヲ隔 枕近ク居寄テ

校異①ナシ（盛・四・覚）・入たうハ聲いかめしき人にてをハしけるかこゑわな、きいきもよはくことのほかによハリいりて身のはたのあかき事へにをさしたるにことならず ふきいたすいきのすゑにあたるもの炎にあたるにたり（長） ②「同」アリ（覚） ③正（長）

「治承物語」をめぐる試考

(一)

——延慶本『平家物語』の東大寺「伽藍ノ罰」関係記事——

橋口晋作

筆者は、先に、拙稿「平家物語における三島明神と春日明神——延慶本『平家物語』・『源平盛衰記』と覚一本『平家物語』との対照を中心に——」^(注一)において、

清盛死去の場面は「金銅十六丈ノ盧舎那仏ヲ奉リ焼給タル伽藍ノ罰ヲ立所ニカフリ給ヘルニコソ」(延慶本)といったとらえ方が中心になつていて、三島明神の影響を確認できる表現はない

と、延慶本『平家物語』(後は、延慶本と略称する)・『源平盛衰記』(後は、『』を付けない)での、「有様傳承コソ心モ詞モ及ハレ」(延慶本)ぬ人、平清盛の死去の描写に関心を寄せて置いた。

『平家物語』の冒頭、「平家先祖之事」(延慶本)で、この物語の主人公らしく、「諸行無常」・「盛者必衰」の道理が収斂して行った人物、清盛の死去の場面は、冒頭から続いていた関心がひとまず終わるところであり、冒頭部の意味を顧みさせ、かつ、新たな展開への意図を思い巡らせないではおかないところである。

筆者は、その一つの方角を、梶原正昭氏の

たとえば、治承四年の源三位頼政の挙兵はみじめな失敗に終わるけれども、それは動乱や事件の結末ではなく、まさに出発点であつたわけで、この翌年の清盛の死、それが「治承の物語」としてはいちばん最後の出来事になるのですが、それらの事件を契機に、どんどん新しい展開を見せるようになる。

という言葉の中に^(注二)見出そうと思う。即ち、「治承物語六局^{平家}」の面影を探る一つの手懸かりとして、この場面を考えてみたいのである。

方法としては、延慶本の表現・記述を中心にしながら、源平盛衰記・長門本『平家物語』(後は、長門本と略称する)・四部合戦状本『平家物語』

(後は、四部合戦状本と略称する)・覚一本『平家物語』(後は、覚一本と略称する)のそれにも目を通すという方法を取りたい。締まりを欠く論になるかも知れないが、諸本の状況をも参照したいので、お許しを乞う。

(注一)『香椎潟』第二十六号(昭和五十六年三月)

(注二)『シンポジウム』日本文学⑤『平家物語』(昭和五十一年三月)第

一章『平家物語』の生成 外部資料の意味 「兵範記紙背文書」